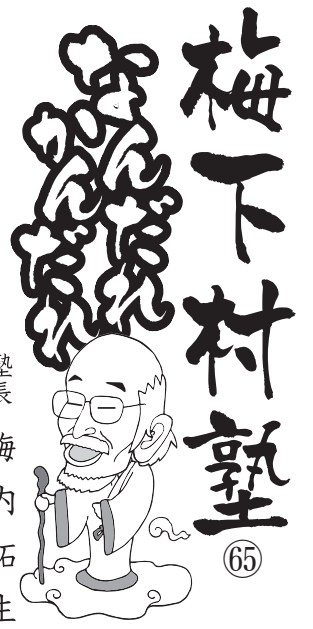


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

東日本大震災から学ぶもの(1)

(東日本大震災は縄文、蝦夷、アイヌの魂を甦らせた)

ルポタージュ「遺体 明日への十日間」

釜石市に在住の盛小学校和中学校で同級だった千葉淳君から電話があった。2月19日には映画「遺体 明日への十日間」の試写会に出席するために上京することである。

この作品は東日本大震災の釜石市の遺体安置所での状況を石井光太氏がルポタージュし、「遺体 震災、津波の果てに」として新潮社から出版されたものを、君塚良一監督、西田敏之主演で映画化されたものである。千葉淳君は釜石市の民生委員を長年つとめてきて

おり、草の根の演劇活動など住民の活動を行ってきいている。

昨年5月に大船渡市と気仙沼市で開催した「森と水と命の惑星」国際会議には千葉淳君もシンポジュームのパネリストとして参加した。国際会議の合間に千葉淳君と話をしている時に「自分が小学校6年生の時に、朝の授業で暗唱させられた、宮沢賢治の「雨にも負けず」がきっかけで、草の根活動を続けているのだな!」と語っていた。このことは既に「梅下村塾⑥」に掲載済みである。

千葉淳君の役を演じた、福島出身の西田敏之氏の東北弁のいいまわしと千葉淳君の常日頃のいいまわしが響き合っていて、遠い遠い昔に気仙地方に住んでいた、先祖の言葉と響き

合っているような世界が浮かんできた。

気仙の文化は、底流では縄文、蝦夷、アイヌ文化と続いているという感覚は、金田一京助先生の協力を得て、山田秀三氏によって出版された「アイヌ語地名の研究」やケセンきらめき大学地元学部長の熊谷 章氏の「三陸気仙の地名物語」からも

浮かんでくる(梅下村塾④参照)。

(鹿踊り 鬼剣舞い、一中生の俳句、短歌)

宮沢賢治の作品には鹿踊り、鬼剣舞いの記述がある。宮沢賢治は熱心な法華経信者であったと聞いている。宮沢賢治の世界には、縄文、蝦夷、アイヌの魂と仏教の魂、さらには科学に息づいている西欧の魂とが響き合っているのではないかと思われる。

とつながっているものが感じられた。それは、外が大雨のなかで、講堂の中で行った合唱を詠んだ作品の中に現れている。

「雨を忘れて合唱」は、縄文の洞窟生活、森の中の草ぶき小屋の生活と響き合うものが感じられた(梅下村塾⑥参照)。そこには優しく、恵み深く、しかし恐ろしい自然への感謝と畏敬が交り合った微妙な感覚が浮かんでくる。この微妙なバランス感覚こそ21世紀文明が育て、身にしみ込ませ、共有すべき価値観である。くしくも、2月7日(木)の第1面の世迷言は「中国海軍のフリゲート艦が海上自衛隊の護衛艦と護衛艦搭載のヘリコプターに対し、火器管制用のレーダーを二度にわた

り照射していたことが判明、日本政府は在日中国大使館に抗議したが、本来あってはならないことが現実不起こっていることは中国の指示によるものなのか、あるいは凶に乗った軍部の暴走なのか、それが分かつとはしなくも中国の実態を露呈

することになる」と述べている。

21世紀は異なる政治体制と文化の関係を如何に相互が納得できるように調和するかが、最も重要な命題である。これに応えるべく、気仙は歴史と文化と津波の経験から、知恵を掘り出して、心を育てて、国の内外に発信しなければならぬと思う。

(詠んでつなげる)

詩人で英文学者の西脇順三郎氏は「詩とは遠く離れたものをつなげることだ」というようなことを国文学者で俳人の山本健吉氏との対談で云っていた。古今東西、人々は詠んで、いろいろな思いを表し、伝えてきている。

イギリス人で東洋の詩歌を深く研究してきたブライス博士は仏教、道教、儒教からはじまる、中国の詩、和歌、連歌、俳句のつながりを研究し、これらには、共通の魂が流れていることを述べている。

れた東海文芸の一部の作品をとりあげて、社会文化の視点から評を加えてきましたが、この度、大船渡短歌界のグループが1935年のチリ津波や今回の東日本震災を詠んだ作品集をあつめてくれるという話し合いがあり心強く思っております。これらの作品をつなげると、海と山の恵みを受け、津波という自然災害と付き合ってきた気仙地方の歴史と文化の姿とその魂が浮かんでくると思えます。

先に述べたように、これら気仙の活動の一部はすでに東京の西多摩新聞を介して、「にしたま文華塾」として実を結び、四国の高知新聞との文化活動協力の話し合いも計画されております。詠むことは、自分では気づかない心の奥の魂と話し合っていることです。この魂は人類が共有できるものなのです。気仙から詠んでつなげることによる、気仙と人類に共通する魂のメッセージの発信を期待しております。